

用例——国語大辞書の前提——  
The Quotations—the First Process for the Compilation of  
the Comprehensive Japanese Dictionary——

金子 豊  
*Yutaka Kaneko*

*Résumé*

In this article it is intended to clarify the necessity of gathering and recording quotations and of describing the definition of each word based on them. For the study of vocabulary, quotations are also useful and indispensable. A comprehensive dictionary, therefore, is to include them as many as possible in an effective way.

In the historical study of each word, changes in meaning and usage should be described and dated. Accordingly, the first and most important process of compiling a comprehensive dictionary is to gather rich quotations so that the above is made possible.

Secondly, the writer believes that in Japanese, in which Chinese characters are used together with *kana's*, not only the meaning of word but also that of each Chinese character must be provided to satisfy the conditions for a comprehensive Japanese dictionary. Therefore, as an example, a Chinese character ‘愛’ which can be translated ‘love’ in English is examined to prove the necessity of recording the meaning of each Chinese character.

On using dictionaries, it is necessary to understand the characteristics of individual dictionary, and at the same time each dictionary must be examined to find its merits and demerits. After looking over existing Japanese dictionaries, the author tried to show the direction of compiling a usable Japanese dictionary based upon an evidence gained from the data concerned the historical change of usage and meaning of the specific character cited above.

(Department of Mathematical Engineering and Instrumentation  
Physics Library, University of Tokyo)

序

- I. 語彙研究における辞書の役割
  - II. 語史と語釈
  - III. 上代文学にみえる“愛”の字義
- 結

## 序

これまで本誌上をかりて、国文学における用語索引と国語辞書について触れてきた<sup>1)</sup>。現実の問題点は、国文学の用語索引はまだ電子計算機によって作製されておらず、国語辞書では「大日本国語辞典」や「大言海」以上の国語大辞書を手にすることができないということである。

用語索引および国語辞書にとって、用例がいかに必要であるかを強調するのは、在来の国文学における用語索引や国語辞書が、その備えるべき形態からみると、全般に不完全ではないかと思われるからである。もともとことばの使われ方なり意味を知ろうとすると、たいてい用例が参照されるはずであるから、そうした要求にこたえるべき用語索引や国語辞書は、当然用例をもっと積極的にともなうようにしなければならない。電子計算機による国語の用語索引作製については、以前から国立国語研究所にて鋭意研究開発中であり<sup>2)</sup>、国語辞書に関しても、「上代語辞典」(丸山林平著 明治書院 昭和42年)や「時代別国語大辞典 上代編」(上代語辞典編修委員会編 三省堂 昭和42年)があいついで刊行されたことによって、徐々にではあるが旧態を脱皮しつつある。

こうした状況に立った上で、ことばの起源・変遷・意味などの解明に欠くことのできない用例をもとに、主としてその辞書において占める意義と、そこで記述される語史や意味との関連を明らかにしようとした。

### I. 語彙研究における辞書の役割

はじめに：ここで目的としている国語大辞書概念を明らかにしておかなければならない。国語大辞書とは、まず国語における全ゆる語彙を網羅し、かつ必ず用例をともなっていることが根本的な条件であると考えられる。そこでは“文例のなきみだしは往々にして幽霊語である。また、よくいはれるやうに、文例を有しない辞書は骸骨<sup>スケルトン</sup>である”<sup>4)</sup>との見解が支持されるので、万一用例に欠ける場合には、国語大辞書編纂の態度を誤ったものとみなさざるをえないことになる。次に、辞書とは①語を蒐集し、②ある順序に排列し、③説明を加えた書ということが出来る<sup>5)6)7)</sup>。ゆえに、この2つの要素からなる場合に、国語大辞書といえるものと定義したい。

辞書の役割については“表現を成立させ、理解を成立させるだけでなく、そこには基準的なものが示されてゐて、要するに正しい伝達のための媒介者であり、手段

となるものである”<sup>8)</sup>といわれていて、この引用文の主語となっている“字書、辞書”の区別については、“字典と辞典とは、正確に言えば同じでない。字典とは、文字の一字ずつを集めて排列し、字義を解いたものである。辞典とは、ことばを分類排列し、語義を説いたものである。であるから、国語字典はないはずであるけれど、漢和字典はありうるし、また、事実あった。しかし、現行の漢和辞典の大部分は、熟語も集めて説明しているもので、字典と辞典とを兼ね、しかも字義とはいえず、語義でもあるから、漢和辞典といったほうがよい”<sup>9)</sup>と指摘されている。だが、国語は漢字をもとにして作られたし、たとえ表記とはいえず上代文学は漢字だけを用いて表わされているので、国語大辞書の内容は辞書である上にさらに字書格的でもなければならぬと思われる。この場合の字書格的性格とは、漢字一字から成り立っていて、国語においてことばとして使用されているような文字、たとえば“あい(愛)”のような、が該当することになる。従来の国語辞書ではこの字書格的性格があまり重視されていなかったきらいがある。国語辞書でこの面の改良に取り組んで異色を放っているのは「岩波国語辞典」で、その意識ととられた手段は“漢字母を、その字音に基づいて、本文中に排列した。これは、単に漢字辞典を国語辞典の中にまぜようとしたものではない。元来、日本語の中には多数の漢語が含まれている。その漢語を構成する単位としての漢語の働きを明確にする必要があると考えたからである”<sup>10)</sup>と述べられている。また、見出し語において和語と漢語の区別に配慮を加えているのが「新潮国語辞典」である。

次に、国語大辞書に収容すべき語彙の範囲であるが、これは別の言葉でいえば、国語学の対象や範囲から明らかにされることにもなる。そこにおいては“国語学は国語即ち日本語を研究の対象とする学問である”<sup>11)</sup>あるいは“国語は即ち日本語的性格を持った言語の総称となるのである”<sup>12)</sup>などとみられ、国語大辞書の対象とすべき語彙は、現存している国語資料から得られることになる。その範囲は“現在及び過去の一切の日本語である”<sup>13)</sup>から、その種類は

- (1) 現在行はれてあるあらゆる種類の口語及び文語
- (2) 日本語を文字又は記号(乎古止点の如き)で書いた国内国外一切の文献
- (3) 内外の文献に存する日本語に関する記載
- (4) 外国語の中に入った日本語
- (5) 日本語と同系統の言語

となる<sup>14)</sup>。ただ、過去におけることばのありさまの把握は、先にも触れたように現存資料によることを唯一の条件とし、あわせて当該資料の特徴とその採否の判定も加えた上で、はじめて用例蒐集の対象として使用しうることになるから、直接の資料としては主にこのうちの(1)と(2)に限定されることになる。

この用例の蒐集は、国語大辞書に収容すべき語彙を選定するためになされると同時に、用例はその証左としてその語彙のもとに属することになるから、有史以来現在までの音声言語(spoken language)と文字言語(written language)とを対象とすべきことになる。原則として口語の用例も辞書にとって無視してはならないものの、口語が辞書とのつながりを生じるのは、そのことばが文字として記録され、用例蒐集の対象となつてからになる。つまり、辞書に採るべき語彙は少くとも文字言語として定着していることが要求されるわけで、そこに口語に対する文語の特質の一面が認められる。口語は、辞書の規範という観点からみれば、むしろ用例蒐集の対象としてはならないことが主張される。ただ、その場合に注意しなければならないことは、文字言語は音声言語に比べて、実に僅かな数量でしかないことである<sup>15)</sup>。

辞書に収められる用例に対し、語彙史の側面からは、まず個々の語についてその発生・変化・消滅の跡を明らかにするために、時代別の国語辞書の出現が望まれるとして、“その予備作業としてすべての語について用例を集め、語義・語形の変化を跡づけてゆくことが必要である”<sup>16)</sup>といわれている。そして、その着眼点は“一般に、在来の辞書では本来の意義・用法は明らかであるが、それが何時から変化したか、明確を欠く場合が多い。これは語形についても同様である”<sup>17)</sup>から、語彙の研究と辞書との間の関連については、

語彙研究の結果は辞書として収録され、また辞書は語彙研究のための大きな手がかりを与へるものである。最近、各種の索引が相次いで作成され、語彙研究に寄与するところが大きい。今後も種々の索引の作成されることが望ましく、近世語では西鶴・近松などの作品について、また明治以後では鷗外・漱石・藤村など、代表的な作家の作品について索引が作成される必要がある。しかし、それにしてもすべての文献にわたって索引を作成することは不可能であらう。やはり総合的に語彙を収録し、語形・語義・用法を説明した辞書を必要とする。ところが、現在

の辞書はいまだ不備であつて、満足すべき状態ではない。特に、どの時代の辞書でも多くは前の時代の辞書を利用して編集されることが多く、時には前の辞書の誤りをそのまま踏襲することもある。これは古辞書にもしばしば見られるところである。後世においてもその弊を免れない。

と指摘されている<sup>18)</sup>。ここでは単に辞書そのものの充実が説かれているだけでなく、索引作製と語彙研究と辞書とは、まさに三者一体となつて相互に依存していることがうかがわれる。このうちの索引作製、すなわち用語索引については後に述べるとして、語彙研究と辞書作製のどちらにも共通していることは、用例が絶対に不可欠であるということにはほかならない。

辞書における用例の意義を省みるならば、辞書の実用性として“(一) 見出し語の多いこと。(二) 語積が(A) 簡潔であると共にムラがないこと。(B) 誤りを含まないこと(C) 語の本質を射当てると同時に、普遍妥当性を持つこと。(三) 具体的な用例もしくは出典を備えること”<sup>19)</sup>の3つが要求されることを掲げている山田忠雄氏は、この(三)につきさらに別の文献において詳細に説明している<sup>20)</sup>。

具体的文例は、いふまでもなく、その文献(言語体系)内において、平均水準的であるか、なにほどかかたよつてゐるかのいづれかであらう。また、その時代一般においても当然おなじ事情がかんがへられる。意義の分類と語積とが文例によって決せられる以上、編纂者には当該文献の味読とひろい意味の理会とが要請され、また同時代における位置を判定すべき十分なる鑑識力をそなへることが必須の資格となる。しかうして、かかる理会は原文に即することによつてはじめて可能である以上、まごびきはつとめてさげなければならぬ。一步ゆづつて、事務の簡捷上、一旦は、まごびきしても後日かならずたしかめることが必要である。まごびきにとどまるかぎりにおいて、ただしき本文獲得のチャンスはつひに永久にうしなはれる。まごびきにあまんじるかぎりにおいてその業績は先人の域をぬきでることはついにないであらう。その長短にかかはらず、文献のただしき引用が容易ならざることをおもふとき、まごびきもしくはおとれる本文についての辞書の価値がいかなるものに属するかはいはずしてあきらかなるとこ

ろ、みぎの意味で、従来公刊の国語辞書はそのほとんどすべての項目において再検討を要することきはめておほいのである。

また、諸橋轍次氏の切実なることばも、辞書における用例の必要性を考える上で示唆されることが多い<sup>21)</sup>。

一体自分の読書生活で何にどれだけ、何にどれだけ時間を用いているだろうかとそう考えて調べてみると、一日中の三分の一か少くとも四分の一は字引を引くことと、原典の考証とに用いられていることに気がつきました。その時痛烈に感じたことは、もし完全な原典によって完全な解釈を施した辞典が出来て居るならば、どれだけ後来の学者に裨益するだろうということでした。併しそんな辞典の出現をまつ訳にも行きませんから、せめて自分の読んだ書物にだけでも索引を作って自分の勉強を助けようと始めたのです。留学から帰りまして後は学生にも手伝ってもらって、やや大げさに索引製作を始めました。併しそれは飽くまで自分の勉強本位のものでありましたが、さて辞典編著に当りましてはそれが非常に役立ちました。そしてまたこの索引作製の最初の趣意が大漢和辞典編纂の趣旨とも相通ずるものであることが解りました。

さらに、古くは松井簡治氏も辞書にとって用例がいかに大切であるかにつき言及している<sup>22)</sup>。

辞書に出典用例を掲げることは、不可欠の事柄である。出典は、その語の由来した古書の源を示し、用例はその語の使用を例示するのである。既往の辞典に於て、「和訓栞」・「雅言集覽」等は、特にこれが掲出に意を注ぎ、現在の辞書では「大日本国語辞典」・「言泉」・「大言海」・「大辞典」は、何れもこれを収容してゐる。然し尚将来は進んでその出典の精確と用例の妥当とを期する必要がある。特に、上古語で現代まで意義の変化もなく、一貫して用ひられてゐるといふやうな語でも、出典の外に各時代の用例を一一掲出し、又或る語が一時死語となり、時代を隔てて復活したといふやうなものがあれば、これを証拠づけるため、上古の出典と復活した時代の用例とを示すといふ様な用意まで進みたいものである。

このようにみえてくると、辞書において用例がどうして採られなければならないのかとの問いに対しては、用例だけがその語彙についての具体的な使用状況を知らせてくれるからであるということになる。そのことは、戦後ようやく著しくなってきた国文学、ことに仮名文学作品における索引の刊行を、“平安朝語彙の根本的研究に参加すべきものであろう”<sup>23)</sup>とする見解と、根本においては相通ずることにもなる。

辞書における用例の呈示を、英国の辞書の発達過程でみてみると、そもそも(用例集)を背景にもっていたことが知られる<sup>24)</sup>。そこでは、用例の扱い方に S. Johnson や C. Richardson に見られるような引用句の例証的用法 (the illustrative use of quotation) と、O. E. D. による引用句の歴史的用法 (the historical use of quotation) とあって、前者は“‘引用句’を当時の慣用法を示す実例として、あるいはかれらが正しいと考える用法を実証するものとして、それに資料的価値を認めた”<sup>25)</sup>のであるが、後者は“‘引用句’もしくは‘用例’に歴史的証拠 (historical evidence) としての価値を認めた”<sup>26)</sup>のである。このように O. E. D. は用例に対して文学的な見解にとらわれることなく、資料に対しては一貫して科学的態度でのぞんだから、“語の意味・用法・歴史的発達・変化など、ぼう大な資料に見られる個々特殊の言語事実を検討して、それぞれの時期の一般的な語義や語法を確定する原理を引きだす”<sup>27)</sup>という歴史的・帰納的性格 (historical and inductive character) を打ちたてることができたわけである。この根本的な態度は、辞書編纂者は歴史家であって批評家であってはならないということにつきる。同じ英語辞書でも英国と米国とではかなりの相違がみられ、概して次のような特徴が指摘されている<sup>28)</sup>。

1. 英国系の辞書は辞典主義に徹し、米国系の辞書は伝統的に事典主義を貫き、多分に百科事典的であること。
2. 米国の辞書には、百科事典的附録が必ずついていること。
3. 米国製辞書には総じて慣用語に対する冷淡さが著しいこと。

ここにおいて、国語大辞書のとるべき方針としては、収容すべき語彙を国語における文字言語の文献資料に求め、全ゆる語彙を収めるように極力努めるべきこととなる。そして蒐集された用例の呈示は、例証的用法によるのではなくして歴史的用法によるべきである。

さて、その用例蒐集のしかたであるが、この点については用語索引を基礎とすべきことはいうまでもあるまい。筆者はこれまで concordance の訳語に用語索引を用いてきた。このコンコーダンスのレーゾンデートルについては、“ある一つの語または語句が A という作家によってどう用いられているかを徹底的に知りたいという要求が生じる。実際、こまかい語学的な研究をおこなおうとするばあいには、この要求を感じるものがしばしばである”<sup>20)</sup> とみえていて、用語索引にも当然そうした必要性がみられるわけで、用語索引があれば辞書の編纂に当って用例の蒐集が容易になされることは、先に用例の不可欠な理由として示された諸氏の引用からも納得されるとおりである。ところが国文学の用語索引に関しては、用例をともしない用語索引が少なくないという点で内容的に十分でなく、なおかつ重要なことは用例をともしない用語索引に対する認識が未だ不十分であると察せられることである。現状においては、用語索引に用例を欠いてはならないという正当な理解が、より一層積極的な実践によって強く要請されるべきことになる。語彙の研究が用例の蒐集からはじまることが常識であるとするならば、どうして用語索引に用例をともしないことが少なく、辞書に用例を取ることが軽視されるのか理解に苦しむところである。ましてや用語索引の数は中世文学以後において乏しく、国語大辞書はようやく作製されはじめたところである。

ところで、辞書は個々の作品から蒐集された語彙と用例をもとに、どのようにして作製されるのであろうか。その手続きについて S. I. ハヤカワ氏は、

辞書を作る仕事は、それが及ぼそうとする全範囲にわたってばう大な量のその時代のまたはその題目の文献を読むことから始まる。読む時には、編集者はカードに、あらゆる興味ある、または珍しい語や、普通の語で変った特別な用法、更に普通の語の普通の用法、それらの語が現われる文などを写し取る。

おけ

牛乳おけが家に牛乳を増やす  
キーツ『エンデイミオン』  
I, 44—45

すなわち各語とともに各語の本文が集められる。大きな辞書編集の仕事になると、例えば『オクスフ

ォード英語辞典』(Oxford English Dictionary)(約二十五巻に及ぶ)などでは、こうしたカードが何百万枚も集められ、編集の仕事は何十年もかかる。カードが集められると abc に分けて分類される。分類が終ると、どの語にも、二つか三つから数百にも及ぶ説明の引用文がついている。

語の定義づけをするためには、辞書編集者は自分の前にカードを置く。カードにはその語の説明がついており、そのカードはある大学または歴史的に重要な人の、その語の実際の使い方が代表的に載せてある。編集者はそれを念入りに読んで、あるものは削り、他は読み返し、カードの山を、その語の幾つかの意義だと思われるところにより分ける。最後にかれは定義を書くが、定義はその語の意味を現わしている目の前の引用文にもとづかねばならぬという厳密な規則にしたがって書くのであって、編集者はその語がこういう意味であるべきだと自分は思うということに影響されてはならぬ。かれはカードにしたがって仕事をするか、ぜんぜんしないか、である。

それ故、辞書を書くということは、語の「真の意味」についての権威的な叙述を打立てる仕事ではなくて、人の能力一杯に種々の語が遠いまたは近い過去に著者たちにとってどんな意味であったかを記録する仕事である。辞書の書き手は歴史家であって法律を作る人ではない。

といっている<sup>20)</sup>。このように、辞書を作るのに用例と出典を記したカードを作成し、分類し、さらに引用文にもとづいてその語を解釈することは、諸橋徹次氏も明言している<sup>21)</sup>。そして佐々木達氏は英国の辞書編纂の作業の歩みをたどった上で、個々の原典の glossary を集成して dictionary を作る場合には、一定の手順が必要であるとして

たとえば Shakespeare の一つの作品の注解を集めて glossary を作ったとすると、次は同じく Shakespeare の他の作品の glossary を作りたくなるし、またそうするのが正しい順序である。なぜかという用語だけについてみても、同じ作家の作品には同じ語が何回も同じ意味に用いられるはずである。したがって原典の数が多ければ多いほど注解も比較対照することができて正確になり、また glossary そのものの実用価値もそれだけ増すことになる。こう

して ‘Shakespeare dictionary’ (または lexicon) が完成されると、次にそれと同時代の Marlowe, Kyd など劇作家の dictionary をこしらえ、さらに詩、日記、年代記と資料を加えてゆくと、そこに Elizabethan English の辞書が出現する。現にアメリカの Michigan 大学で編纂している Dictionary of Tudor and Stuart English その他のいわゆる「時代別辞書」(period dictionaries) は、こうした手順で作られているはずである。

このように、個々の作品から同じ作家の他の作品へ、次に同時代の他の作家へ、つづいて他の時代へと、しだいに資料の範囲を広げてゆくやり方は、個別的 (individual) な case から特定の (particular) な case へ、特定な case から特殊的 (special) な case へと進んでいくことなのであって、この方法によって辞書に含まれる知識の間に関連が得られるのである。

と述べている<sup>32)</sup>。さらに、こうした用例にもとづいて行なわれる語彙研究のありさまは、

言語史に於ける発生的研究とは個々の事実 (語でも句でも文構造でも) の発達の跡を——実際の証拠について辿ることである。伝統的な表現形式は無反省に用ゐられてゐて形式上の特徴が意識されない場合が沢山あるから、歴史を無視して発生的特徴を直ちに心理的に説明することは危険で、先づ事実を歴史的に確立することが必要である。オックスフォードの大辞典は英語史の発生的研究の金字塔であり、これを編纂し直して時代別辞典を作ることは英語史の記述的研究に多大の便宜を与へるであらう。

においてうかがえるのである<sup>33)</sup>。O. E. D. が英語史の発生的研究ならびに記述的研究に貢献しうるのも、ひとえに用例の完備とその歴史的記述にもとづく編纂態度のゆえであって、この方法はなにも辞書だけに限らず、語彙研究にもそのまま当てはまることである。国語大辞書は今のところ時代別の国語辞書作製によって完成されていくようであるから、ゆくゆくは全編の集大成を考慮しなければなるまい。「時代別国語大辞典」の刊行予定によると、先の「上代編」に続いて昭和46年に「室町時代編」(上中下3冊)、昭和49年に「平安時代編」(上下2冊)、以下続刊として「鎌倉時代編」「江戸時代編」をも

って完結することになっている。

これまで国語大辞書作製のために、辞書の意義及びその構成、内容などをみてきた。そして、語の意味の記述には用例が重要なのであって、辞書では蒐集された用例にもとづいて語の説明がなされることになり、そのような語を網羅してはじめて辞書が作製されたことになるのがわかった。その結果、特に用例の蒐集とともに歴史的記述による編纂態度の必要性が確認された。そこにこそ辞書が語彙研究に結びつく根拠がみられるわけである。国語大辞書とはこの語彙研究を補い得るような用例の宝庫として、各語についてその全貌を呈示しなければならないのである。

## II. 語史と語釈

辞書において用例の不可欠なことが明らかにされたが、用例がいくら蒐集されたとしても語の意味の説明が不満足であっては、辞書としての価値が低くなるのは当然である。この場合、前もって断っておかなければならない点は、ことばの意味は広義には哲学の分野に属することになるが、ここではもっぱら語の意味、すなわち語義、語釈に限って触れることにした。また、この語釈を正しく行なうことは、実はそう簡単なことではないのである。つまり、何をもちて語義の正しさを判定し、そうした評価の基準、尺度をどこに求めるかは、個々には具体的に論じられるとしても、総体的にはきわめて明確になしえないからである。いえることはせいぜい用例にもとづく語釈であるかどうかくらいであろう。それでも一般的には、辞書における語とそれに附随した参照の取り扱いで、利用上注意すべき点としては、

歴史——意味、用法等における変化は明示され、その年号が記されているか。

定義——定義は明解で、正確で、適切であるか。

例証の用例——用例は歴史がたどれるように年号が記され、年代順の排列と正確な出典で、率直に呈示されているか。

などが指摘されている<sup>34)</sup>。言語学における意味の位置づけでは、意味論そのものが音声学に対応していることが知られ<sup>35)</sup>、この意味論の構造については、文体論 (stylistics) は構文論 (syntax) の上位にくるはずであって、下位には semantics (語義論) と morphology (語形論) をふくむ語彙論 (lexicology) がきて、これら3つが集まって言語の意味論 (semasiology) をなしているといわれている<sup>36)</sup>。今は意味の観点からのみ個別にみたのである

が、全体的にありのままをみるならば、言語学における form が“外形（即ち音またはその代写物たる文字）の意で、内容即ち意味といふ心理的現象に対する物理的事象を指す”場合には

Form の材料は音声であるから、言語の外形の研究は音声学 (phonetics) に基礎を置き、内容即ち意味の研究は意味学 (semantics) に基礎を置くべきである。しかし言語は純粋に form だけでもなければ、純粋に meaning だけでもなく、form と meaning の結合したものであるから、両者を同時に考へなくてはならない。語 (word) が意味的音声の単位 (semanto-phonetic unit) であるといはれるのはこの意味に外ならない<sup>37)</sup>。

ということになるであろう。そこで、この語の意味とはどのようにして理解されるかといえ、橋本進吉氏は“語の意味を明かにするには、その語がさし示す実物の概念を明かにする事、その語が如何なる場合に用られるかを知る事、殊に、実際の言語に用られた場合の多くの実例を集めて、前後の関係やその場合の事情からしてその意味を明かにする事、その語の対義語（正反対の意味をあらはす語、「上」に対する「下」「前」に対する「後」など）をもとめる事、類義語（意味の類似した語）をもとめて、それとの意味の相違を明かにする事などが有力な方法である”<sup>38)</sup> といひ、時枝誠記氏は“意味は事物に対する主体的な把握の仕方と考へることによってその本質を理解することが出来るのである。故に某々の語はこれこれのことを意味するといふことは、正しくは、某々の語によって、これこれの事物に対する主体の意味的把握を表してゐると見るべきである”<sup>39)</sup> といひ、前の橋本氏は語義について論じ、後の時枝氏は語の使用において使用者がその語に託した意味を問うていて、語の定義を下すにあたってはどちらも無視できないことになる。いづれにしても用例は語の意味の変遷や語形の変化を知る上で、歴史的事実としての価値もっているから、辞書ではそうした用例を必ず呈示し、語釈はその用例にしたがって行なわれなければならないことが強調される。そうすると、用例にもとづく語釈が完全に行なわれるためには、その前提として少くとも用例の蒐集とその呈示は、単に不可欠であるばかりでなくして、積極的に充実を図るべく努められなければならないし、用例の呈示は歴史的記述にもとづいて行なわれるべ

きであるから、ある語のもとに集められた用例は年代順に排列されることになる。我が国ではこの形態を語史、語誌、語歴とさまざまに呼ばれていて、この語史については“個々の単語の発生と変遷と絶滅の歴史を研究するもので、語源又は語史の研究である。此は、いふまでもなく、古代から現代にいたる各時代の実例を出来るだけ集めて歴史的研究をほどこし、且つこの語の国語中の各種の言語に存するものを集めて比較研究を行ふべきである”<sup>40)</sup> と述べられていて、このうちの歴史的研究とは“一つの言語の各時代の状態を比較してその変遷を研究する方法”<sup>41)</sup> とされている。そこではまた語の意味の変化について“その語の各時代の文献に於ける用例から帰納せられた各時代の意味・辞書注釈書等に挙げられたその語の意義等に基づいて歴史的研究法により、且つ各種の言語（ことに諸方言）に於けるその語の意味を比較研究によって之を明かにする外無い”<sup>42)</sup> といひ、第1にすべきこととして、問題の語についてその語がいつ頃から文献にみえているか、またその語の最も古い時代の形（音）と意味とはどうであるか、を明らかにすることを指摘している。<sup>43)</sup> こうした語歴の研究については“普通、国語史家は一語の消長の考証にすくなくとも5～10年を優にかける”<sup>44)</sup> といわれている程で、各時代にわたって巾広く用例を求めた上で結論を導くという手固さを踏むことを思えばむしろ当然であろうが、用語索引の利用はまさにその手掛りとなるのであるから、そのありかたは数と質の両面から完備されることが強く望まれる。国語大辞書にとっては、そうして編まれた語史によって語釈が行なわれ、ことばが正しく記録されると同時に、実はそうすることによってことばの正しさが指摘されなければならないと思われる<sup>45)</sup>。ところで、辞書における語の意味に対して批判がないわけではなく、次にその主なもの掲げてみたい。

1. 丹念に用例を集めて細かく書きさへすれば、例へば一語に五六十の項目を分けて詳しく記述すれば、いい辞書が出来るといふオプティミズムがあるかに感ぜられる。しかしたとひ五六十の項を立てて説いても、もし唯それだけでとまり、そこに統一を見或いは一貫した筋を擱まなければ、結局その雑然たる総体が何故一つの語に託せられたかが分らず、語義なる概念の明晰さは依然得られない<sup>46)</sup>。
2. まず第一に、辞書にある単語の意味というものは、概略的なものであることにじゅうぶん注意する

必要がある。現在のいかに完備した辞書でも、個々の単語のあらゆる場面における意味を記載しているわけではない。本来厳密を期するためには、いろいろの表現の差異に関与しているような単語の意味はすべて記録されるべきであり、さらに、個々の単語がいかなる脈絡を生じえないかということも記されるべきである。しかし、あらゆる言語表現を調査して、個々の場合における単語の意味を記録してゆくことは事実上不可能であるし、またそのような必要もないであろう。が、辞書に記載されていない意味は存在しないと思ったり、辞書にその使用を禁止していない用法は全部可能であると思うような錯角におちいつてはならない。

辞書において単語に与えられている意味というのは、本来的には、脈絡からの抽象によるものである。OED は 600 万以上の引用スリップを用いたといわれ、単語の意味に関する決定はそれらの単語が用いられている引用文に基づいて行なっている。もちろん、辞書を作る際、すでに存在する他の辞書の定義や用例も参照されるであろう。が、単語の意味を決定する最終的なよりどころは実際の慣用である。辞書が実際の慣用にある程度の影響を及ぼすこともありうる。けれども、このような現象は言語全体からみると、きわめてかぎられており、また成立過程からみれば、辞書というものは、まず特定の脈絡における特定の単語の使用という言語事実が存在し、それからあとで作られたものであることをじゅうぶんに認めなければならない。これらのことは、少し古い時代の単語について考えるとき、いっそうよく理解されるであろう<sup>47)</sup>。

3. 既述のように言語の意味はその用いられる脈絡によってきまってくるので、言語そのものに固有の意味というものはない。言語は個人の恣意をこえて一定の意味をもつと考えられるが、これは言語が社会的習慣である以上、各語はいつも大体同じような脈絡において使用されるということにほかならない。ときには比喩的に、別の脈絡において用いられることがあるが、それが習慣になれば意味変化が生じる。語の意味が客観的にきまっているように思われるのは、その語のおかれる脈絡が安定しているというだけのことである。I.A. Richards がいうように proper meaning があると思うのは迷信であろう。

辞書にあげられた定義というのは、実際の用例を

調べて、その意味を反省して記述したもので、その語のおかれた脈絡のちがいに、意味の方もいくつかに分類さる。そのことは N. E. D. を見れば明瞭であろう。辞書に Proper meaning が規定されているのではなく、辞書は用例に追随するものである。そしていわゆる辞書の意味 (lexical meaning) は現実の脈絡から抽象され一般化されたもので、厳密に言えば我々が上に意味として考えてきたものではない。書物を読んでいるとき、ある語の意味がわからなくて辞書を引いてわかったという場合、辞書にあげられた定義は現実に理解された意味に対し、形式の内容に対する関係にあると思う。いわゆる辞書の意味は内部言語形式にすぎないと考えられる。すなわちそれは言語音声の表象である外部言語形式に伴い、ある内容の表象を喚起するけれども、それ自身意味をなさず言語形式に属するものである。真の意味とは脈絡で決定されるもの、contextual meaning のことであると考えられる<sup>48)</sup>。

4. このように語の意義の弁別をどの段階にとどめるかということは辞書の目的によって違うわけで、編纂者のつねに苦心する点であろう。しかし、いかに詳細な辞書でも、いかに簡略な辞書でも、辞書という形式に許される知識の取扱い方には限界がある。その下の限界は individual cases に応ずるということであり、上の限界は special cases に応ずるということである。この限界を越えて、たとえば general cases の必要に応じようということはきわめてむずかしい。語の辞書を例にとれば、個々の原典を読むさい、意味不明の語を辞書で引いて、それが分かるように編まれていれば、一般の辞書としての目的は達せられたのである。そのさい一々の context にびったり当てはまらなくとも、ことなる意義との区別が知られる程度でもよい。言いかえれば、particular cases には十分応じられなくても special cases に応じられれば一応満足しなればならぬ、ということである<sup>49)</sup>。
5. つまり「アップル・パイ」の適確な定義づけはコトバではできない——実際のアップル・パイを手にとって見、食べてみる必要がある。このことはもっと抽象的な語にもあてはまる。もしわれわれが実際に「愛」を感じたことがなければ、もしある「道徳」を強く感じたことがなければ、いくら「愛」や「正義」をコトバの上で一しかかって定義しつづけ



てみても、遂にその意味はわかりはしない<sup>50)</sup>。

これらの批判に対しては、率直に言って辞書とはこんなものであったのだろうか、改めて問い返さざるをえないことである。辞書の編纂は用例蒐集——解釈(分類)——記述の順で行なわれ、辞書における語の意味の問題点は、たとえ用例の蒐集に不備がみられるとしても、その根本は記述にあることがほぼ明らかとなった。それは具体的には、個々の用例の意味が抽象され、より上位の概念で記述されるから、どうしても意味の上でずれが生じることである。だから一見解釈にはそれほど問題がないようにも思われるが、解釈の必要性については“語の意味はその語の用いられる場面や、それを理解する人の経験によってさまざまになる。言語を正しく理解するためにはその言語の発達した社会や、その言語を話す人の経験を知らなければならない。ここにおいて解釈(interpretation)の必要が生じてくる”<sup>51)</sup>といわれており、この解釈とは“作品を対象として、作者の意図を全人間のにとらえること”<sup>52)</sup>であるものの、“知的な解釈のあとに全人間的な解釈がのこる”<sup>53)</sup>ことになって、ここにも記述に関連して問題の一端がうかがわれることになる。このことは辞書の作製、中でも肝心の語の意味の記述にも通ずることになる。つまり、“寄り合い分担方式で辞書を作るのは、それなりの利点をもつが、また出来栄えにおのずからの限界のあることが、こんなことから分るようだ。用例を集めるのは人海戦術でもまず可能だが、解説を書く段になると、一人一人の読みの深さが問題になる。やはり辞書は人間が作るものである。その人間の読み込む力だけの解説しか書けないものようである。これは案外見落されていることのように思われる”<sup>54)</sup>それである。この言語生活における辞書の限界は、単に作製上だけでなく使用する上においても“われわれが話したり書いたりする際、語を選ぶに当り、われわれは辞書が提供する歴史的記録に案内されることはできるが、それに束縛されることはできない。なぜなら、新しい状況、新しい経験、新しい発明、新しい感情が、常にわれわれに古い語に新しい用法を与えさせているからだ”<sup>55)</sup>とみられる。こうしたことから辞書の編纂態度を省りみると、用例の蒐集については語の意味の記述をおろそかにしてはならないことを教えられるのである。それにしても先の解釈のしかたは巨視的で、もっと微視的に焦点を合わせた解釈のありかたも検討されなければならない。殊に語義、語釈という面からみると、“一つの文の

意味は、文中の個々の語(及び形式)の意味に基づいて解釈せらるべきものである故、まづ個々の語の意味が明かにせらるべきは言ふまでもない……それ故、語義を明かにするには、或一つの文、又は同種の文に於てその語が如何なる意味を表はすかを見るだけでなく、ひろく種々の文に於ける用例からしてその語の根幹たる意味を帰納しなければならぬのである”<sup>56)</sup>あるいは“文字の字体・読み方を正して語形を明らかにした上で、その語形がどんな意味を表現しているかを明らかにしなければならない。一語一語は具体的な文章の中で特定の意味をもって使われているが、それもそれぞれの時代において意味する範囲はおのずから限定されている”<sup>57)</sup>といわれていて、こうした語の解釈もつきつめていけば作者の意図を明らかにすることになるわけである。そして辞書における語の定義について、見坊豪紀氏は“平明簡易ということ”を

- A (1) 専門用語は、一般用語で解説する。
- B (2) 古語・文語は、現代語・口語で言いかえる。
- (3) 難語は、基本語で言いかえる。
- (4) 特殊用語(方言・隠語など)は、正常語で言いかえる。
- C (5) やさしいコトバは、内容を説明する<sup>58)</sup>。

とした上で、ことばの言語的構造には、外面的構造(シンタックス的構造)と内面的構造(用法的構造)があることをあげた後に、

このようにコトバの構造というものは、直接的には言語的構造であることも多いのであるが、根本的には意味・用法といったものにささえられた言語構造である。あるいは、言語表現的に制約された意味構造なのである。ただし辞書の定義づけ作業は、意味を哲学的に独立にとりあつかうことを本旨としなさい。あくまでも、言語の外面的構造を手がかりとし、言語としての構造を無視、破壊することなく意味の分析を進めなければならない。外面的構造がみとめられないときに初めて、意味・用法とよばれるもの、つまり形式的には文というシンタックスの中で、内容的にはいろいろの状況に対応する特色ある文脈の中で、慎重に分析を開始しなければならない。そして分析がおわったら、順序をこわさないように総合し、最後に、以上の結果にもとづいて、定

義としての表現にまでねりあげなければならない。いわゆる、言いかえとは、等価値（と考えられる）語によるおきかえであって、それは分析——総合の省略された手続きなのである。

と述べている<sup>69)</sup>。ここではそうした定義のしかたよりも、むしろ定義を行なうための手続きを誤らないという点を強調したい。それは語史と語釈の間にみられるのであって、主の語史が客観性を貫くことができるのに対し、語釈は従として主観的な側面をおびていることである。辞書における語史は、用例が同じ語の中でも意味によって分類され、年代順に排列されることになるから、語釈は少なくとも語史の成立を基準として行なわれるべきであろう。もちろん、はじめから用例の少い語はこの限りでない。また、語釈における補助資料としては、これまでに発表された語彙についての研究成果を一覧できるようにすることも必要になってくる。

このように語史にもとづいて行なわれる語釈は、各用例を含む文学作品の解釈、研究と、語彙史における研究に負うところがいたって大なのである。

### III. 上代文学にみえる“愛”の字義

国語大辞書の作製には、国語学と国文学の両者の研究成果が要請されていることがわかった。そしてこれまでの国語辞書には字書性格が欠けていることと、わが国における“愛”ということばの端緒・源流が不明であることを知って<sup>60)</sup>、愛の字義と愛の端緒・源流を上代文学の実際の用例について調べてみることにした。わが国におけることば“愛”の史的変遷およびその受容については、すでに秀れた諸論考が発表されていて<sup>61)62)63)</sup>、その端緒・源流を求めるには、本来は上代から現代にいたる諸作品にわたって通時的考察がなされ、あわせて上代、中古にわたっては特に共時的考察がなされなければならない。しかし、今回は上代文学における文字“愛”の用例のみを取り上げ、その内容の分析を試みた。また、愛の字義は上代における用例からどのような場合に使われているかを知らうとした。一口に上代文学といっても国文学史における時代区分は未だ定説に至っておらず<sup>64)</sup>、ただ最近の動向からいえば「日本文学史 全六巻」(至文堂)および「講座日本文学 全13巻 別巻1」(三省堂)が、いずれも上代・中古・中世・近世・近代の区分を採用しており、この区分にさらに現代を加えた6期区分説が定着しつつあるようである。また各区分における年代

の区切りも区々であって、上代と中古の境はおよそ平安京遷都(延暦13年)の8世紀末が目安とされている。だが、こうした時代区分を行なうこと自体につき、“連続と断絶とが入りまじっている人間生活の中の事実の推移をくぎることには、いずれにしても多少の無理をとまなう”<sup>65)</sup>との指摘もみられる。そこで上代文学の下限として9世紀に成立した作品でも「性霊集」まで加えることにした。上代の語彙を把握するのに有用であると判断されるからである<sup>66)</sup>。テキストには岩波の日本古典文学大系本を使用した<sup>67)</sup>が、次に用例蒐集の対象として取り上げた作品名、成立年代、その他を掲げた(成立年代は各作品の解説によって決定し、作品名の排列は成立年代順とした)。

項番	大系番号	作品名	略称	成立年代	用例数
イ	1	古事記	記	和銅5(712)	23
ロ	2	風土記	風土	養老2(718)	15→8
ハ	67・68	日本書紀	紀	養老4(720)	69
ニ	69	懐風藻	懐風	天平勝宝3(751)	12
ホ	4-7	万葉集	万	宝亀9(778)	47
ヘ	71	三教指帰	三教	延暦16(797)	7
ト	69	文華秀麗集	文華	嵯峨弘仁9(818)	5
チ	70	日本靈異記	靈異	弘仁14(823)	23
リ	71	性霊集	性霊	承和元(834)	46
	1	祝詞	祝	延長5(927) <sup>67)</sup>	0
	3	古代歌謡集	古謡		5→0

この場合、用例数とは文字“愛”の使用回数とした。したがって、用例の採択もこの方針にならって行なった。このうちで「祝詞」には用例がみられず、一方「風土記」の用例数15→8、「古代歌謡集」の用例数5→0は、テキストによれば用例が各々15例および5例みられるのであるが、その中で他の作品との重複や上代の用例としてふさわしくないとと思われる例を除いた数が、各々8例と0例になったことを表わしている。その不適当な用例の詳細は、

風土記 7例(いずれも逸文中のもので、その出典と記載箇所を掲げる)  
 積日本紀 巻十二 (423頁)

万葉集註釈 巻第一	(443頁)
塵袋 第三	(454頁)
帝王編年記	(458頁)
釈日本紀 巻十二	(475頁)
和歌童蒙抄 第三	(505頁)
塵袋 第二	(528頁)
古代歌謡集 5例 (典拠となっている作品名とその記載箇所を掲げる)	
日本書紀	(131頁)
日本書紀	(208頁)
風土記	(225頁)
古今和歌集	(449頁)
古今和歌集	(449頁)

となっている。そこでこの240例につき、文字“愛”の使われ方を品詞別にみてもと、内訳は

	作品名	用例数	名詞	動詞	形容詞	感動詞	接頭語
イ	古事記	23	1	1	17	0	4
ロ	風土記	8	1	4	3	0	0
ハ	日本書紀	69	10	14	38	1	6
ニ	懐風藻	12	3	9	0	0	0
ホ	万葉集	47	13	12	22	0	0
ヘ	三教指帰	7	6	1	0	0	0
ト	文華秀麗集	5	2	3	0	0	0
チ	日本靈異記	23	15	8	0	0	0
リ	性霊集	46	27	19	0	0	0
	合計	240	76	73	80	1	10

となる。各品詞に属する語彙とその出典を以下に示す。用例の蒐集は各作品にあたって確かめた。出典の呈示は各作品の成立年代順とし、同一作品の中は使用順とした。テキストにおいて作品が2冊以上になっている「日本書紀」と「万葉集」は、各冊の区別を国とか曰のように表示し、頁数にはアラビア数字を用いた。なお、用言は終止形にて示した。まず、用例の訓み下し文において、“愛”の文字の部分にふりがなのない例は

愛 万曰60. 四470 靈異178. 408. 性霊163. 175. 219. 315  
愛河 万曰56  
愛鬼 三教113

愛心 靈異146. 148. 294  
愛欲 靈異166. 214. 294. 360  
感受 万曰14  
生愛 靈異160  
嘆愛 靈異198  
真砂子地 万曰262  
愛す 三教133 靈異126. 178. 294 性霊 169. 171. 225. 233. 291. 369. 447. 457. 467  
得 万曰66  
愛づ 万四196  
愛し 記66. 190

の通りである。また「日本靈異記」70頁の用例“愛(クモ)り”はテキストの校異および補注によれば、誤字または省文と思われるため別にした。

### 1. 名詞

あい(愛) 懐風110 文華249 性霊397. 463  
あいか(愛河) 性霊303  
あいが(愛河) 性霊327. 345  
あいけい(愛敬) 性霊8  
あいげう(愛樂) 靈異232  
あいごう(愛偶) 三教137  
あいごく(愛獄) 性霊289  
あいし(愛子) 三教93  
あいち(愛智) 靈異182  
あいち(愛知) 靈異256  
あいちん(愛珍) 性霊215  
あいでん(愛纏) 性霊295  
あいにゃく(愛溺) 性霊299  
あいは(愛波) 三教143  
あいばく(愛縛) 性霊159. 315  
あいらん(愛輪) 性霊341  
うつくしび(慈愛) 紀曰251  
うつくしび(愛) 紀曰31  
うつくしび(愛情) 万曰256  
え(可愛) 紀曰125. 曰143  
えひめ(愛比売) 記54  
えみし(夷) 紀曰205  
おんあい(恩愛) 性霊375  
けいあい(敬愛) 懐風118  
けうあい(嬌愛) 文華250  
けんあい(兼愛) 性霊368  
しょうあい(鐘愛) 性霊291. 305. 371. 371  
じんあい(仁愛) 性霊357

せいあい (聖愛) 性霊235  
 ぞうあい (憎愛) 三教106. 141  
 ちあい (癡愛) 性霊377  
 なびはしづま (隱愛妻) 風土260  
 はくあい (博愛) 性霊259  
 はんあい (汎愛) 懷風106  
 まなご (愛子) 万㊦176. ㊦398 靈異104. 400  
 まなご (最愛子) 万㊦222  
 まなごつち (真砂子地) 万㊦262. ㊦318  
 めぐしとおもほすみころ (憐愛) 紀㊦135  
 めぐみ (愛) 紀㊦311. ㊦507  
 みぐみうつくしび (寵愛) 紀㊦521  
 めぐみうつくしび (仁愛) 紀㊦373  
 めで (愛) 万㊦102  
 れんあい (怜愛) 万㊦144

2. 動詞

あいしす (愛死す) 性霊431  
 あいす (愛す) 性霊177. 187. 319. 433, 439.  
 449. 451. 455  
 あはれぶ (愛重ぶ) 文華240  
 うつくしぶ (愛しぶ) 万㊦258. ㊦60-2. ㊦62.  
 ㊦132  
 うつくしぶ (愛ぶ) 紀㊦493-5. ㊦63 靈異294  
 うつくしぶ (愛養ぶ) 紀㊦31  
 うつくしみす (愛しみす) 風土406  
 うつくしむ (愛しむ) 記192 風土406 万㊦266.  
 ㊦258. ㊦316  
 うるはしむ (親愛む) 懷風70  
 おもふ (愛ふ) 紀㊦507  
 くなかひす (愛婚す) 靈異294  
 このむ (愛む) 紀㊦133. ㊦135. ㊦487 懷風70.  
 74. 82. 177  
 じあいす (自愛す) 性霊42  
 つつしむ (自愛む) 風土72  
 つとむ (自愛む) 紀㊦223  
 にたしみす (篤愛す) 紀㊦177  
 めぐしとおもほす (鍾愛す) 紀㊦227  
 めぐみす (愛す) 紀㊦383  
 めぐむ (愛む) 紀㊦131. ㊦239. ㊦257. ㊦257.  
 ㊦273. ㊦301. ㊦315. ㊦397. ㊦  
 503. ㊦95. ㊦175. ㊦191. ㊦221.  
 ㊦487

めぐむ (愛寵む) 紀㊦465  
 めぐむ (寵愛む) 紀㊦63. ㊦159  
 めぐむ (慈愛む) 紀㊦421  
 めづ (愛づ) 記192. 紀㊦375. ㊦451. ㊦451. ㊦  
 19. ㊦95 懷風108. 132. 133. 140  
 万㊦286. 文華242. 292 靈異114  
 よみす (愛みす) 紀㊦405  
 をしむ (愛惜しむ) 風土406  
 をしむ (愛む) 紀㊦125. ㊦297. ㊦309

3. 形容詞

うつくし (愛し) 記60. 62. 64. 66 紀㊦261.  
 ㊦261. ㊦379. ㊦379. ㊦221  
 万㊦208. ㊦260. ㊦290. ㊦118.  
 ㊦172. ㊦198. ㊦202. ㊦270.  
 ㊦362. ㊦378. ㊦362  
 うるはし (愛し) 記116. 紀㊦91. ㊦95. ㊦95.  
 ㊦13 万㊦296  
 かなし (愛悲し) 記310-2  
 はし (愛し) 記98. 188. 188. 188. 190. 240.  
 240. 240. 風土40 万㊦124. ㊦214.  
 ㊦218-20. ㊦290. ㊦318. ㊦162. ㊦  
 226. ㊦360  
 めぐし (愛し) 紀㊦445. ㊦205. ㊦225  
 めづらし (好愛し) 風土34  
 めづらし (愛らし) 風土50  
 をし (愛し) 紀㊦125. ㊦309

4. 感動詞

え (愛) 紀㊦381

5. 接頭語

え (愛) 記54. 54. 54. 54  
 え (可愛) 紀㊦83. ㊦83. ㊦83. ㊦83. ㊦85. ㊦  
 87

なお、この他に原文で用いられている文字“愛”に対  
 し、訓み下し文でひらがな書きになっている例には  
 うつくしむ 万㊦150  
 うるはしむ 万㊦194  
 うるはし 万㊦402  
 はし 万㊦338  
 などがみられる。これで上代文学においてみられる文字

“愛”の語彙とその出典を示し終った。愛の端緒・源流と愛の字義を知るために、文字“愛”の用例からその本質にせまろうとしているのであるが、これらの中でも訓み下し文において“愛”の1字のみでなりたっている単語に、より純粹な愛の文字の意味が読み取れるものと思われる。蒐集された用例においてこの条件に該当する語は、訓みの不明な

愛(名詞) 愛す(動詞) 愛づ(動詞)  
愛し(形容詞)

の4語24例と、訓みの明らかな

名詞 4語8例

愛(あい)(うつくしび)(めぐみ)(めで)

動詞 12語62例

愛しぶ(うつくしぶ)  
愛しみす(うつくしみす)  
愛しむ(うつくしむ)  
愛す(あいす)(めぐみす)  
愛づ(めづ)  
愛ふ(おもふ)  
愛ぶ(うつくしぶ)  
愛みす(よみす)  
愛む(このむ)(めぐむ)(をしむ)

形容詞 6語49例

愛し(うつくし)(うるはし)(はし)(めぐし)(をし)  
愛らし(めづらし)

感動詞 1語1例

愛(え)

接頭語 1語4例

愛(え)

の24語124例、それに訓み下し文においてひらがな書きになっている4語4例となる。そして、愛の端緒・源流は以上のうちの名詞と動詞によってうかがわれ、愛の字義は名詞、動詞、形容詞、感動詞、接頭語によって説明されるものと思われる。“愛”の文字1字からなる単語の働きを品詞別に示せば、各作品における用例数は、

	略称	名詞	動詞	形容詞	感動詞	接頭語	計
イ	記		2	15		4	21
ロ	風土		2	2			4
ハ	紀	3	30	14	1		48

ニ	懐風	1	8				9
ホ	万	3	11	22			36
ヘ	三教		1				1
ト	文華	1	2				3
チ	靈異	2	5				7
リ	性靈	6	17				23
	計	16	78	53	1	4	152

のようになる。では、この分類からもれた語例を作品順に掲げると、

- イ. 古事記……愛上比売(えひめ)、愛悲(かな)し。
- ロ. 風土記……好愛(めづら)し、自愛(つつし)む、  
隠愛妻(なびはしづま)、愛惜(を)しむ。
- ハ. 日本書紀……可愛(え)、憐愛(めぐしとおもほすみ  
ころ)、篤愛(にたしみ)す、夷(えみし)、慈愛  
(うつくしび)、愛寵(めぐ)む、寵愛(めぐみうつく  
しび)、愛養(うつくし)ぶ、寵愛(めぐ)む、自愛  
(つと)む、鍾愛(めぐしとおもほ)す、仁愛(めぐ  
みうつくしび)、慈愛(めぐ)む。
- ニ. 懐風藻……親愛(うるはし)む、汎愛(はんあい)、  
敬愛(けいあい)。
- ホ. 万葉集……感愛、愛情(うつくしび)、愛河、得、  
愛子(まなご)、最愛子(まなご)、真砂子地(まなご  
つち)、怜愛(れんあい)。
- ヘ. 三教指帰……愛子(あいし)、憎愛(ぞうあい)、愛  
鬼、愛偶(あいごう)、愛波(あいは)。
- ト. 文華秀麗集……愛重(あはれ)ぶ、嬌愛(けうあ  
い)。
- チ. 日本靈異記……愛子(まなご)、愛心、生愛、愛欲、  
愛智(あいち)、嘆愛、愛楽(あいげう)、愛知(あい  
ち)、愛婚(くなかひ)す。
- リ. 性靈集……愛縛(あいばく)、愛敬(あいけい)、愛  
珍(あいちん)、聖愛(せいあい)、博愛(はくあい)、  
愛獄(あいごく)、鍾愛(しょうあい)、愛纏(あいで  
ん)、愛溺(あいにかく)、愛河(あいか)、愛河(あ  
いが)、愛輪(あいらん)、仁愛(じんあい)、兼愛  
(けんあい)、恩愛(おんあい)、癡愛(ちあい)、愛死  
(あいし)す、自愛(じあい)す。

となる。そこで、先の“愛”の文字1字からなる単語の品詞別分類につき、さらに各作品における単語の使われ方をみると、

用例—国語大辞書の前提—

作品名	語彙 (名詞)	めぐみ	うつくしび	あい	愛		計
					めぐみ	めぐみ	
イ	記						
ロ	風土						
ハ	紀	2	1				3
ニ	懐風			1			1
ホ	万				2	1	3
ヘ	三教						
ト	文華			1			1
チ	靈異				2		2
リ	性靈			2	4		6
計		2	1	4	8	1	61

作品名	語彙 (形容詞)	うつくし	愛し	はし	うるはし	めづらし	めぐし	をし	計
ロ	風土			1		1			2
ハ	紀	5			4		3	2	14
ニ	懐風								
ホ	万	11		9	2				22
ヘ	三教								
ト	文華								
チ	靈異								
リ	性靈								
計		20	2	18	7	1	3	2	53

作品名	語彙 (動詞)	めぐ	うつくしむ	うつくしみます	めぐむ	めぐみます	よみます	うつくしぶ	をしむ	このむ	おもふ	うるはしむ	愛づ	愛す	あいます	計
ロ	風土		1	1												2
ハ	紀	5			14	1	1	2	3	3	1					30
ニ	懐風	4								4						8
ホ	万	1	4					4				1	1			11
ヘ	三教													1		1
ト	文華	2														2
チ	靈異	1						1						3		5
リ	性靈													9	8	17
計		14	6	1	14	1	1	7	3	7	1	1	1	13	8	78

以上に感動詞 え(紀)と接頭語 え(記)を加えると、152例の全貌が明らかにされたことになる。次に、用例を掲げることにするが、まず原文を白文にて示し、その後に丸かっこにてその用例における文字“愛”の訓みをテキストによって加え、品詞と注を付し、さらに角かっこにて出典を記した。

- 1 愛上哀登古袁(え, 接。会話文)〔記54〕
- 2 愛上袁登壳袁(え, 接。会話文)〔記54〕
- 3 愛袁登壳袁(え, 接。会話文)〔記54〕
- 4 愛袁登古袁(え, 接。会話文)〔記54〕
- 5 愛我那邇妹命乎(うつくしき, 形。会話文)〔記60〕
- 6 愛我那邇妹命(うつくしき, 形。会話文)〔記62〕
- 7 然愛我那勢命(うつくしき, 形。会話文)〔記64〕

- 8 愛我那勢命 (うつくしき, 形。会話文) [記66]
- 9 愛我那邇妹命 (愛しき, 形。会話文) [記66]
- 10 於心思愛而寐 (はしく, 形) [記98]
- 11 我者愛友故用來耳 (うるはしき, 形。会話文) [記116]
- 12 孰愛夫與兄歟 (はしき, 形。会話文) [記188]
- 13 答日愛兄 (はしき, 形。会話文) [記188]
- 14 汝寔思愛我者 (はし, 形。会話文) [記188]
- 15 孰愛夫與兄 (はしき, 形。会話文) [記190]
- 16 妾答曰愛兄歟 (愛しき, 形。会話文) [記190]
- 17 不忍其后懷妊及愛重至于三年 (めで, 動) [記192]
- 18 猶不信忍愛其后 (うつくしむ, 動。会話文) [記192]
- 19 孰愛兄子與弟子 (はしき, 形。会話文) [記240]
- 20 愛兄子 (はしき, 形。会話文) [記240]
- 21 弟子者, 未成人, 是愛 (はしき, 形。会話文) [記240]
- 22 愛乎我胤 (はしき, 形。歌謡) [風土40]
- 23 郷体甚愛 (めづらし, 形。会話文) [風土50]
- 24 名曰石上神之木蓮子玉 愛而固藏 (うつくしみて, 動。会話文) [風土406]
- 25 此人有美玉 愛之罔極 (うつくしみする, 動。会話文) [風土406]
- 26 替我愛之妹者乎 (うるはしき, 形。会話文) [紀国91]
- 27 愛也吾夫君 (うるはしき, 形。会話文) [紀国95]
- 28 愛也吾妹 (うるはしき, 形。会話文) [紀国95]
- 29 必彼矣。宜愛而養之 (めぐみて, 動。会話文) [紀国131]
- 30 愛育黎元 (めぐみ, 動。会話文) [紀国239]
- 31 天皇愛之, 引置左右 (めぐみて, 動) [紀国257]
- 32 生而天皇愛之 (めぐみ, 動) [紀国257]
- 33 汝孰愛兄與夫焉 (うつくしき, 形。会話文) [紀国261]
- 34 愛兄也 (うつくしき, 形。会話文) [紀国261]
- 35 夫以生所愛 (めぐみし, 動。会話文) [紀国273]
- 36 美日本武之功而異愛 (めぐみ, 動) [紀国301]
- 37 忍愛以入賊境 (めぐみ, 名) [紀国311]
- 38 朕顯愛子 (めぐみし, 動。会話文) [紀国315]
- 39 爰天皇愛兄媛篤温清之情 (めでて, 動) [紀国375]
- 40 汝等者愛子耶 (うつくしきや, 形。会話文) [紀国379]
- 41 甚愛也 (うつくし, 形。会話文) [紀国379]
- 42 唯愛之者也 (めぐみし, 動。会話文) [紀国383]
- 43 朕欲愛是婦女 (めぐまむ, 動。会話文) [紀国397]
- 44 其人雖不知朕之愛 (よみする, 動。会話文) [紀国405]
- 45 朕心異愛之 (めぐし, 形。会話文) [紀国445]
- 46 恆愛京城傍耳成山・畝傍山 (めづ, 動。会話文) [紀国449]
- 47 唯愛京傍之兩山而言耳 (めでて, 動。会話文) [紀国451]
- 48 天皇愛寵之 (うつくしび, 動) [紀国493-5]
- 49 長而愛民 (めぐみたまふ, 動) [紀国503]
- 50 天垂溥愛, 賜以兩兒 (めぐみ, 名。会話文) [紀国507]
- 51 今日, 失我愛夫 (うるはしき, 形。会話文) [紀国13]
- 52 天皇壯大, 愛士礼賢 (めで, 動) [紀国19]
- 53 其愛深矣 (うつくしび, 名。会話文) [紀国31]
- 54 天皇愛之, 常置左右 (うつくしびたまひて, 動) [紀国63]
- 55 為愛其子 (めでて, 動。会話文) [紀国95]
- 56 愛子一也 (めぐむ, 動。会話文) [紀国95]
- 57 汝命與婦, 孰與亢愛 (をしき, 形。会話文) [紀国125]
- 58 何愛一女, 以取禍乎 (をしみて, 動。会話文) [紀国125]
- 59 天皇不信佛法, 而愛文史 (このみたまふ, 動) [紀国133]
- 60 汝若不愛於学 (このまぎらましかば, 動。会話文) [紀国135]
- 61 父天皇愛之 (めぐみたまひて, 動) [紀国175]
- 62 愛育之情 (めぐみ, 動) [紀国191]
- 63 悉長老如失愛兒 (めぐき, 形) [紀国205]
- 64 愛之叔父勞思 (うつくしき, 形。会話文) [紀国221]
- 65 愛寵之情 (めぐみ, 動。会話文) [紀国221]
- 66 汝不忘先王之恩, 而來甚愛矣 (めぐし, 形。会話文) [紀国225]
- 67 若是細馬, 即生貪愛 (をしむ, 動。会話文) [紀国297]
- 68 汝愛身乎 (をしむ, 動。会話文) [紀国309]
- 69 不愛也 (をしくも, 形。会話文) [紀国309]
- 70 愛俱流之衛 (え, 感。歌謡) [紀国381]
- 71 為天命開別天皇所愛 (めぐまれ, 動) [紀国487]
- 72 亢愛文筆 (このみたまふ, 動) [紀国487]
- 73 朕嘉厥尊朝愛國 (おもひて, 動。会話文) [紀国507]
- 74 太子天性明悟。雅愛博古 (このます, 動) [懷風70]

- 75 及壯愛武 (このみ, 動) [懐風74]  
 76 頗愛屬文 (このみ, 動) [懐風82]  
 77 聖衿愛良節 (めでたまひ, 動) [懐風108]  
 78 冠周埋尸愛 (あい, 名) [懐風110]  
 79 君候愛客日 (めづる, 動) [懐風132]  
 80 有愛金蘭賞 (めでて, 動) [懐風133]  
 81 聖衿愛韶景 (めで, 動) [懐風140]  
 82 亦頗愛篇翰 (このむ, 動) [懐風177]  
 83 愛伎妻等者 (はしき, 形) [万日124]  
 84 愛 人之纏而師 敷細之 (うつくしき, 形) [万日208]  
 85 愛八師 榮之君乃 伊座勢婆 (はしき, 形) [万日214]  
 86 情毛不行 愛八師 妹之有世婆 (はしき, 形) [万日218-20]  
 87 累月之後, 更起愛心 (うつくしぶる, 動。詞書) [万日258]  
 88 出去, 之 愛夫者 天翔哉 (うつくし, 形) [万日260]  
 89 草枕 羈行君乎 愛見 (うつくしみ, 動) [万日266]  
 90 愛寸 事盡手四 長常念者 (うつくしき, 形) [万日290]  
 91 愛妻之兒 (はしき, 形) [万日290]  
 92 愛常 吾念情 (うるはし, 形) [万日296]  
 93 愛八師 君之使乃 (はしき, 形) [万日318]  
 94 又説, 愛無過子 (愛, 名。詞書) [万日60]  
 95 尚有愛子之心 (うつくしぶる, 動。詞書) [万日60-62]  
 96 誰不愛子乎 (うつくしびず, 動。詞書) [万日62]  
 97 神奈我良 愛能盛尔 天下 (めで, 名) [万日102]  
 98 三枝之 中余乎弥牟登 愛久 (うつくしく, 形) [万日118]  
 99 愛也思 不遠里乃 君来跡 (はしき, 形) [万日162]  
 100 浜清 浦愛見 神世自 (うるはしみ, 動) [万日194]  
 101 愛哉師 妹乎相見尔 (はしき, 形) [万日338]  
 102 吾背子之 言愛美 出去者 (うつくしみ, 動) [万日150]  
 103 愛妹 隔有鴨 (うつくし, 形) [万日172]  
 104 愛等 思篇来師 (うつくし, 形) [万日198]  
 105 愛 君之手枕 (うつくしき, 形) [万日202]  
 106 愛八師 不相君故 (はしき, 形) [万日226]  
 107 愛 我念妹 (うつくしみ, 動) [万日258]  
 108 愛等 念吾妹乎 (うつくし, 形) [万日270]  
 109 愛美 君余副而 (うつくしみ, 動) [万日316]  
 110 愛八師 君余恋毛 (はしき, 形) [万日360]  
 111 浪雲乃 愛妻跡 不語 (うつくし, 形) [万日362]  
 112 汝恋 愛妻者 (うつくし, 形) [万日378]  
 113 雲居所見 愛 十羽能松原 (うるはしき, 形) [万日402]  
 114 旃增愛妻之情 (うつくしぶる, 動) [万四132]  
 115 為性好愛花草花樹 (愛でて, 動。割書) [万四196]  
 116 豈有忘旧愛新之志哉 (めづる, 動) [万四286]  
 117 愛 吾妻離流 (うつくしき, 形) [万四362]  
 118 薄愛離別 (愛, 名。詞書) [万四470]  
 119 颯羅羅穀。何応愛喜 (愛し, 動) [三教133]  
 120 使君南来愛風声 (めで, 動) [文華242]  
 121 昔時同輩愛 (あい, 名) [文華249]  
 122 帝者愛貞賜恩顧 (めで, 動) [文華292]  
 123 猴愛之喚入 (めでて, 動) [靈異114]  
 124 愛其母 (愛せ, 動) [靈異126]  
 125 惡逆子愛妻 (愛し, 動) [靈異178]  
 126 不昇妻愛而発逆謀 (愛, 名) [靈異178]  
 127 愛心深入 (愛する, 動) [靈異294]  
 128 父常重愛 (うつくしび, 動) [靈異294]  
 129 不勝愛也至 (愛, 名) [靈異408]  
 130 纏愛如葛旋 (愛, 名) [性靈163]  
 131 永愛四蛇原 (愛す, 動) [性靈169]  
 132 本自愛高峯 (愛す, 動) [性靈171]  
 133 郁孃割愛 (愛, 名) [性靈175]  
 134 西施美咲。人愛死 (あいして, 動) [性靈177]  
 135 沙場可愛 (あいし, 動) [性靈187]  
 136 諸仏威護一子愛 (愛, 名) [性靈219]  
 137 持囊飛錫愛梁津 (愛す, 動) [性靈225]  
 138 切愛此格 (愛す, 動) [性靈233]  
 139 性愛恩深 (愛し, 動) [性靈291]  
 140 吸性真愛无始 (愛, 名) [性靈315]  
 141 衣愛百納 (あいし, 動) [性靈319]  
 142 因愛子而生天上 (愛する, 動) [性靈369]  
 143 護鴈之愛弘深 (あい, 名) [性靈397]  
 144 一乘韜臆愛梁津 (あいす, 動) [性靈433]  
 145 怨親兼愛濟縑素 (あいして, 動) [性靈439]  
 146 愛糟粕瓦礫 (愛すれば, 動) [性靈447]  
 147 世人厭宝女。而愛婢賤 (あいす, 動) [性靈449]  
 148 愛均眼目 (あいすること, 動) [性靈451]  
 149 悉地楽宮莫愛取 (あいし, 動) [性靈455]  
 150 可咲嬰兒莫愛取 (愛し, 動) [性靈457]



151 欲尋昔日愛 (あい, 名) [性霊463]

152 秋菊時可愛 (愛す, 動) [性霊467]

さて、これで上代文学における文字“愛”の字史が出来上がったことになる。用例は歴史的用法にもとづいて呈示したが、上代文学の問題点としては“上代の文献はすべて漢字で書かれているのを最大の特徴とする。それで、これを一般向にかな交じりに書き下すことが古来行なわれてきた。かりに学問上の厳密を求めるものにあっても、それぞれの目的により、必要部分に原型をとどめるだけにして書き下されるのが普通である。これは翻字もしくは転写(transliteration)であるから、それにも確とした規準があるべきであるが、従来のものはそういう考慮以前のものである”<sup>68)</sup>が指摘されていて、この点に関連しては“万葉集の本文たる歌謡は漢字で表記され、しかもその様式が複雑多岐であるため、こんにち明確に訓読できるものはその中の限られた一部であり、解釈にあたって、まずとげられねばならない重要な作業は、その正確な訓法を究明すること”<sup>69)</sup>ともいわれている。この訓読については、テキストの古事記、風土記、日本書紀、懐風藻・文華秀麗集、日本霊異記などの各凡例においてもそれぞれの方針がみられるが、こうした訓読の手掛りとなる資料としては、①漢字漢語の辞書 ②仏典の注釈書である音義の類 ③漢文に訓点を附した点本があげられている<sup>70)</sup>。先に得られた“愛”の字史にもとづいて字義の変遷をふり返ってみると、“愛”の文字はまず古事記において会話文の中にみられ、字史1と2の伊邪那岐、伊邪那美二神の唱和は話しことばをそのまま記録したという様相が端的に出ていて、貫之は“このうた、あめつちの、ひらけはじまりける時より、いできにけり”<sup>71)</sup>といっているが、文字“愛”にとっても最も原初的な形態であると推察される。そしてこの“エ”の仮名として文字“愛”が用いられている例には、字史 1. 2. 3. 4. 70 の他に愛上比売(記54)、愛瀬誌(紀田205)歌謡、愛豆之可(万田66)歌謡、がみられる。なお、この他にも“え(愛)”の例が大宝戸籍帳、大日本古文書所収正倉院文書、続日本紀(宣命を除く)、歌経標式にもみられる旨記されている<sup>72)</sup>。次に文字“愛”の用例において“愛”の字の指している対象をみていくと

## 形容詞

うつくし (夫, 妻, 兄, 妹, 子, 君, 叔父)

はし (夫, 妻, 兄, 子, 子孫)

うるはし (夫, 妹, 友)

めづらし (土地の形状)

めぐし (美麗き嬪子をえたこと, 児, 先王の恩を忘れてないて来たこと)

をし (命, 婦, 自分の身体)

愛し (夫, 兄)

これらの例外としては、

うつくし 愛しき言盡してよ(字史 90. 万), 三枝の  
中にを寐むと 愛しく 其が語らへば(字史 98.  
万). 愛しと思へりけらし莫忘れと結びし紐の解く  
らく思へば(字史104. 万)はし 其の大神, 具公を昨ひ破りて睡き出すと以為ほ  
して, 心に愛しく思ひて寐ましき(字史10. 記)うるはし 愛しとわが思ふころ(字史 92. 万), う  
るはしき 十羽の松原(字史113. 万)

があって、“はし”の項にはさらに“はしきやし”をと  
もなった歌7首(字史 85. 86. 93. 99. 101. 106.  
110)が加えられることになるので、形容詞については  
大体において万葉集からかなり巾広い使われ方がみられ  
ることになる。同様にして動詞をみてみると

## 動詞

めづ・愛づ (后, 士, 子, 客, 新しい女, 人, 山, 韶  
景, 花草花樹, 親を思うころ, 良節, 金蘭の賞,  
風声, 貞)うつくしむ・うつくしみす・うつくしぶ (后, 人, 子,  
娶った娘女, 君, 妹, 妻, 玉, ことば)めぐむ・めぐみす (子, 黎元, 近習者, 自分自身, 婦  
女, 日本武の功)

をしむ (女, 自分の身体, よき馬)

このむ (文史, 学ぶこと, 文筆, 博古, 文を属すこ  
と, 篇翰, 武)

よむ (鹿)

おもふ (国)

うるはしむ (浦)

ここでの例外としては

めぐむ・めぐみす 愛み育ふ情, 還く還きに隔無し…  
(字史62. 紀). 愛み龍むる情, 比をすべからず(字  
史65. 紀)

が認められる。“あいす・愛す”にいく前に名詞をみ  
ておく。訓み下し文の個所を直接示した。

## 名詞

めぐみ 愛を忍びて賊の境に入らしむ

うつくしび 其の愛を深みせり

めで 神ながら 愛の盛りに 天の下

また、“あい・愛”からは字史番号とともに掲出すれば、

あい・愛

- 78 周が尸を埋めし愛
- 94 愛は子に過ぎたりといふこと無しとのたまへり
- 118 愛薄らぎ離別せられ
- 121 昔時同輩の愛
- 126 妻の愛
- 129 愛を至すことに勝へ不
- 130 愛に纏はること葛の旋るが如し
- 133 耶嬢は愛を割いて能仁に奉る
- 136 諸仏威護して一子の愛あり
- 140 性真の愛を吸うて始無く
- 143 護鴈の愛弘く深く
- 151 昔日の愛を尋ねむと欲するに

動詞

あいす・愛す

- 119 颯纏たる羅縠、何ぞ愛し喜ぶべき
- 124 曾て孝心無く、其の母を愛せ不
- 125 妻を愛し
- 127 愛する心深く入りて
- 131 永く四蛇の原を愛す
- 132 本より高峯を愛す
- 134 西施が美き咲は人愛して死すれども
- 135 沙場、愛しつべし
- 137 梁津を愛す
- 138 近代の才子、切に此の格を愛す
- 139 性は恩の深きを愛し
- 141 衣は百納を愛し
- 142 子を愛するに因って天上に生じ
- 144 梁津を愛す
- 145 怨親兼ね愛して
- 146 糟粕瓦礫を愛すれば
- 147 世人は宝女を厭うて婢賤を愛す
- 148 愛すること眼目に均しくして
- 149 悉地の楽宮すら愛し取ること莫れ
- 150 嬰子を愛し取ること莫れ
- 152 秋の菊時に愛すべし

となって、一見してわかることは“あい・愛”および“あいす・愛す”の用例は、それまでの“愛”の字のつく用例と性質を異にしていることである。そしてその理由は懐風藻、三教指帰、文華秀麗集、性霊集が漢詩文、または漢文による作品のためであって、用例の上からも

“愛”の字の指している対象の類型的な変化がみられる。だからその用例を取り除いてみると“あい・愛”では字史 94. 118. 126. 129 となり、“あいす・愛す”では字史 124. 125. 127 となって、それぞれ万葉集と日本霊異記においてはじめてみられることになる。そこで作品別にこの 7 例につきみておくことにする。

万葉集（字史94. 出典㉔60頁, 国歌大観番号802）

思子等誦一首

釈迦如来、金口正説、等思衆生、如羅睺羅。又説、愛無過子。至極大聖、尚有愛子之心。況乎世間蒼生、誰不愛子乎。

宇利波米婆 胡藤母意母保由 久利波米婆 麻斯提斯農波由 伊豆久欲利 枳多利斯物能曾 麻奈迦比尔 母等奈可利提 夜周伊斯奈佐農

子等を思ふ歌一首

釈迦如来い、金口に正に説きたまはく、等しく衆生を思ふこと、羅睺羅の如しとのたまへり。又説きたまはく、愛は子に過ぎたりといふこと無しとのたまへり。至極の大聖すら尚し子を愛しづる心あり。況むや世間の蒼生の、誰かは子を愛しびずあらめや。瓜食めば子ども思ほゆ 栗食めばまして思ほゆ 何処より来りしものそ 眼交に もとな懸りて 安眠し寐さむ

〔下線の部分の注として「愛無過子」は最勝王経にそのままの句はないが、「我愛子」「我所愛子」「我最小所愛之子」などと見える。虎のために子を失った捨身品などの記事によって憶良は釈迦の説としたものであるうか。諸注引用の金光明経と称する一文は見あたらない。なお雑阿含経（卷三六）に「所愛無通子」の類似文がある」（428頁）とみえている〕

万葉集（字史118. 出典四470頁, 国歌大観番号4491）

於保吉宇美能 美奈曾己布可久 於毛比都 毛婢伎奈良之思 須我波良能佐刀

右一首、藤原宿奈磨朝臣之妻石川女郎薄愛離別、悲恨作歌也。

大きな海の水底深く思ひつつ裳引きならしし菅原の里  
右の一首は、藤原宿奈磨朝臣が妻石川女郎の、愛薄らぎ離別せられ、悲しび恨みて作れる歌なり。

日本靈異記 (字史124. 出典126頁)

故京有一凶婦 姓名未詳也 曾无孝心 愛其母  
① ②

故京ひとりにあの凶をむなしき婦あ有り。姓名未だ詳いまかならず。曾かつて孝心あきら无く、其の母を愛ずせず。

〔下線の部分の校異は、①国立国会図書館本、群書類従本「不愛」 ②国立国会図書館本、群書類従本「父」となっている〕

日本靈異記 (字史125. 出典178頁)

悪逆子愛妻將殺母謀現報被惡死縁 第三

悪逆の子、妻を愛し、母を殺むす將と謀り、現に悪死かたよを被る縁 第三

〔下線の部分の校異は、国立国会図書館本「愛之」となっている〕

日本靈異記 (字史126. 出典178頁)

時火麻呂 離己妻去 不昇妻愛而発逆謀 思殺我母 遭其喪服 免役而還 與妻俱居

時に大麻呂、己が妻をか離れて去ゆき、妻の愛たに昇あへずしてさかしま逆おこなる謀おこを發し、我が殺ころし、其の喪もに遭あひて服あし、役まわを免れて還り、妻ともと俱ともに居まむと思ふ。

〔下線の部分の注として“妻をいとおしく思うことに堪えられず”(179-80頁)とみられる。また参考として「女愛心不得忍」(148頁)が掲げられていて、その個所の訓読は“女、愛心しのに忍しのぶること得ず不”(149頁)となっていて、注によれば“東人を愛する心にかまんできず”とみられる〕

日本靈異記 (字史127. 出典294頁)

愛心深入 死別之時 恋於夫妻及父母子而作是言

愛する心深く入りて、死に別かるる時は、夫妻と父母子を恋なひて、是の言なを作す。

〔下線の部分の注として“恋慕の情が強く染みついて。攷証「恐有誤脱」という通り、注二と共に、意味がやや明瞭でない。あるいは、前文の注か”(294頁)とみえている〕

日本靈異記 (字史129. 出典408頁)

明規將告 見慈儀 不勝愛也至 詐言而白  
①

明規將む告として、慈儀むを見て、愛を至たすことに勝たへず、詐いつはり言いひて白くく

〔下線の個所の①には校異として前田家本、群書類従本「之」がみられ、なお、狩谷棊齊の「日本靈異記攷証」においては、この群書類従本の底本を“意改”として改訂してあることが示されている。②の注としては“(おっしゃるとおりと)言おうとしたが、慈愛深い師の姿を見ると。前・類本「愛之至」に従う”(409頁)とみえている〕

これだけで漢語としての“愛”および“愛す”の使用を断定するわけにはいかず、むしろ漢詩、漢文などの例にみられたように、“愛”の文字が“アイ”の発音として使用されるようになってきた点に位置づけられるであろう。すでに指摘したように、万葉集では文字“愛”の形容詞の用法に変革がみられることも手伝って、まさに“愛”の字義の変革期であったといえるであろう。このことはまた国語全般についてもあてはまるようである<sup>73)</sup>。

こうして文字“愛”の字義は字史にもとづいて、“エ”を表わした仮名としての使用からはじまって、形容詞(うつくし、はし、うるはし、めづらし、めぐし、をし、愛し)、動詞(めづ・愛づ、うつくしむ・うつくしみす・うつくしぶ、めぐむめぐみす、をしむ、このむ、よむ、おもふ)、名詞(めぐみ、うつくしび、めで)の潮流の中から“愛”(名詞)が万葉集と日本靈異記に、“愛す”(動詞)が日本靈異記に表われてきていることを知った。ただ、“愛”の4例と“愛す”の3例はどれにもその訓みが記されていない。この点に関してはこれまでの方法論を反省することによって“文字の機能の問題は、書かれた作品をとらえて、いちいちの文字がいかなる言語をあらわすかを解説することではなくして、解説が成立する基盤を問うことにかかわるものというべきである<sup>74)</sup>”としていかなければなるまい。わが国におけることば“愛”の端緒・源流については、わが国における“愛”の字義をたどることによって、(アイ)(アイす)の形がみられる以前にまでさかのぼることができた。それでも端緒にいたる糸口が与えられたところで、源流はもっと時代を下ってからのことになる。

## 結

用例をもとにして辞書作製のあらましをみてきたが、

そのシェーマを示せば

1. 対象とする言語の決定（資料の把握とその選定のため）
2. 用例の蒐集（辞書に収める語彙およびその用例を把握するため）
3. 用例の分類と解釈（語義を明らかにするため）
4. 語史を編む（その語のもつ意味の変遷を系統的に知るため）
5. 用例の選択（全体を簡潔にして読み易くするため）
6. 語の意味を記述する

のようになる。そして用例の蒐集から語の記述にいたる辞書編纂の過程を、用例の面からどう対処したらいいかという点、

- I. 個々の作品の用例……用語索引
- II. 個々の作者の用例……語彙辞典
- III. 各ジャンルにおける用例……ジャンル別辞書
- IV. 各時代における用例……時代別辞書
- V. 全時代における用例……大辞書

の全体的視野に立って用意していくべきである。語釈の手續きとしては、一応

イ. 語釈は必ず用例および語史にもとづいて行なうこと。

ロ. 語釈はその対象を語だけに限らないで、国語においては特に字義についても行なうこと。

ハ. 語釈および用例の解釈は、作品、作者、時代を考慮に入れて行なうこと。

ニ. 定義は明解で、正確で、適切であること。

といえるとしても、この解釈、語釈の領分は終局には人間性の問題と切り離せないことになり、辞書の作製も同様で実はそこに辞書の限界と問題点が生ずることになる。その対策としては、なるべくデータとしての用例を豊富に蒐集するとともに呈示するように努め、あわせて語彙についてこれまでの研究文献をリストした文献目録などが作られることによって、極力内容の充実を期するようにしていくべきであろう。辞書の利用のしかたについては一般に知られてはいるものの、そのことでいつも想い起こされるのは、“橋本先生の演習では、大言海にこうあるとか、大日本国語辞典にこうあるとかいうことを頼りにして報告しようものなら、それは冷笑に近い表情で迎えられ、そんな予習の仕方は、怠惰の象徴と受け取られた”<sup>75)</sup> ということと、辞書の作製につき“私は毛彫りのような仕事をしているので、辞書のような大きいものはできない”<sup>76)</sup> と橋本進吉氏が言ったということば

である。辞書の実際の利用にあたっては、個々の辞書の特徴を知ることはもとより、辞書そのものの作製方法や得失を心得た上で接することが必要で、百科辞典については評価のための目のつけどころが述べられていて<sup>77)</sup>、辞書についても同じようなことが考えられることになる。さらにつきつめていけば、辞書について作る側と使う側からとの正しいありかたが定位されなければならないであろう<sup>78)</sup>。

国語大辞書は用例にもとづいて作製されるべきであった、そこでは字義の記述も必要なことを実践によって追求してきた。これはまったく使う立場からの見解である。また、不満足ながらことば“愛”の端緒・源流の問題を取り上げてみた。いわば作る側からの手續きを探ってみたかったからである。

(東京大学計数工学科図書室)

- 1) 金子 豊. “国文学における用語索引のありかた”, *Library science*, no. 4, 1964, p. 181-200.
- 2) 金子 豊. “国語辞書方法論”, *Library and information science*, no. 6, 1968, p. 95-114.
- 3) 国立国語研究所 編. 電子計算機による国語研究. (国立国語研究所報告31) 秀英出版, 1968, p. 91-103.
- 4) 山田忠雄編. 本邦辞書史論叢. 三省堂, 1967. あとがき (3).
- 5) 松井簡治. “辞書” <国語文化講座第二卷 (国語概論篇), 朝日新聞社, 1941> p. 351.
- 6) 築島 裕. 国語学. 東京大学出版会, 1964. p. 194.
- 7) 林 哲郎. 英語辞書発達史. 開文社, 1968. p. 3-9.
- 8) 時枝誠記. 国語問題のために 一 国語問題白書一. 東京大学出版会, 1962. p. 138.
- 9) 長沢規矩也. 大明解漢和辞典. 三省堂, 1963. p. (3)
- 10) 西尾 実, 岩淵悦太郎 編. 岩波国語辞典. 岩波書店, 1967. p. [1].
- 11) 橋本進吉. 国語学概論 (橋本進吉博士著作集 第一冊) 岩波書店, 1946. p. 2.
- 12) 時枝誠記. 国語学史. 岩波書店, 1955. p. 5.
- 13) 橋本, *op. cit.*, p. 35.
- 14) *Ibid.*, p. 35-6.
- 15) 服部四郎. 英語基礎語彙の研究, 三省堂, 1968. p. (2).
- 16) 佐藤喜代治. “語彙史の問題”, *国語学*, 53集, 1963. 6, p. 3.
- 17) *Ibid.*, p. 4.
- 18) *Ibid.*, p. 2.
- 19) 山田忠雄. 三代の辞書 ——国語辞書百年小史—— 三省堂, 1967, p. 38-9.

- 20) 山田忠雄編. 本邦辞書史論叢. *op. cit.*, あとがき(4).
- 21) 諸橋轍次. 漢字漢語談義. 大修館書店, 1967. p. 22-3.
- 22) 松井, *op. cit.*, p. 366.
- 23) 大野 晋. “国語史研究——上代・中古・中世——”, **国語と国文学**, 42巻, 4号, 1960. 4. p. 141.
- 24) 林, *op. cit.*, p. 264.
- 25) *Ibid.*, p. 295.
- 26) *Ibid.*, p. 296.
- 27) *Ibid.*, p. 294.
- 28) 乾 亮一. “ランダム=ハウス英語辞典一机上版”, **学鑑**, 65巻, 9号, 1968. 9, p. 43-4.
- 29) 佐々木達. 言語の諸相. 三省堂, 1966. p. 51.
- 30) ハヤカワ, S.I. 思考と行動における言語, 第2版. 大久保忠利訳. 岩波書店, 1968. p. 54-5.
- 31) 諸橋, *op. cit.*, p. 26.
- 32) 佐々木, *op. cit.*, p. 47-8.
- 33) 中島文雄. 意味論—文法の原理— 研究社, 1968. p. 152.
- 34) Winchell, Constance M. *Guide to reference books*, 7th ed. A.L.A., 1964. p. 216.
- 35) 市河三喜 編. 英語学辞典. 研究社, 1940. p. 747.
- 36) 佐々木達. 語学試論集. 研究社, 1950. p. 143.
- 37) 市河, *op. cit.*, p. 386.
- 38) 橋本, *op. cit.*, p. 203.
- 39) 時枝誠記. 国語学原論—言語過程説の成立とその展開— 岩波書店, 1968. p. 420.
- 40) 橋本, *op. cit.*, p. 381.
- 41) *Ibid.*, p. 260.
- 42) *Ibid.*, p. 283.
- 43) *Ibid.*, p. 286.
- 44) 山田忠雄 編. 本邦辞書史論叢, *op. cit.* p. 80.
- 45) 山田孝雄. 国語尊重の根本義. 白水社, 1940. p. 54.
- 46) 水谷静夫. “語釈——本格的辞書の論の前座——”, **国語学**, 47集, 1961. 12, p. 13.
- 47) 安井 稔. 英語学研究. 研究社, 1967. p. 255-6.
- 48) 中島文雄. “理解と解釈” <齊藤勇博士古稀祝賀論文集 英文学研究. 研究社, 1956> p. 172.
- 49) 佐々木達. 言語の諸相. *op. cit.*, p. 49.
- 50) ハヤカワ, S.I. 思考と行動における言語. 大久保忠利訳. 岩波書店, 1955. p. 158.
- 51) 中島文雄. “理解と解釈” *op. cit.*, p. 171.
- 52) 遠藤嘉基. “古典解釈と文法” <講座解釈と文法. 1 総論. 明治書院, 1960> p. 11.
- 53) 中島文雄. “理解と解釈” *op. cit.*, p. 177.
- 54) 大野 晋. “人間が作る辞書”, **学鑑**, 62巻7号, 1965. 7, p. 51.
- 55) ハヤカワ, S.I. 思考と行動における言語, 第2版, *op. cit.* p. 55-6.
- 56) 橋本進吉. 上代語の研究 (橋本進吉博士著作集 第五冊) 岩波書店, 1951. p. 4.
- 57) 佐藤喜代治. “文法の変遷と古典解釈の方法” <講座解釈と文法. 1 総論. 明治書院, 1960> p. 35.
- 58) 見坊豪紀. “辞書における定義の問題” <コトバの科学4. コトバと論理. 中山書店, 1958> p. 61.
- 59) *Ibid.*, p. 67.
- 60) 松島栄一. “愛と社会——愛の社会的自覚ということ——”, **国文学**, 13巻, 10号, 1968. 8, p. 82.
- 61) 大野 晋. 日本語の年輪. 有紀書房, 1961. p. 91-128.
- 62) 宮地敦子. “「愛す」考”, **国語国文**, 35巻, 6号, 1966. 6, p. 438-53.
- 63) 寿岳章子. 女は生きる—名前が語る女の歴史—, 三省堂, 1968. p. 103-21.
- 64) 久松潜一. 等 編. 日本文学史 総説・年表, 改訂新版. 至文堂, 1964. p. 12.
- 65) 阿部秋生. 中古日本文学概説. 秀英出版, 1961. p. 2.
- 66) 馬淵昭夫. 上代のことば. 至文堂, 1968. p. 18-9.
- 67) 編纂こそ遅かったが, 現在残っている祝詞は奈良時代以後の記録になるといわれていて, 前代からとえられてきた内容をふくんでいるために加えた.
- 68) 池上禎造, “解釈とかなづかい” <講座解釈と文法. 1 総論. 明治書院, 1960> p. 321.
- 69) 春日和男. “万葉集と上代語法. II 助動詞” <講座解釈と文法. 2 記紀歌謡・万葉集・古今集・新古今集. 明治書院, 1960> p. 112.
- 70) 橋本進吉. 上代語の研究, *op. cit.* p. 13.
- 71) 古今和歌集(日本古典文学大系8) 岩波, 1968. p. 93
- 72) 大宝戸籍帳(徳光久也. 上代日本文章史. 南雲堂桜楓社, 1964. p. 676), その他(『時代別国語大辞典 上代編 p. 891)
- 73) 平凡社編. 日本語の歴史. 2 文字とのめぐりあい. 平凡社, 1966. p. 299-300.
- 74) *Ibid.* p. 364.
- 75) 大野 晋. “人間が作る辞書”, *op. cit.* p. 48.
- 76) *Ibid.*, p. 49.
- 77) 神田秀夫. “司書と辞書”, **言語生活**, 156号, 1964. 9, p. 54.
- 78) 吉田金彦. “国語学における古辞書研究の立場——音義と辞書史——”, **国語学**, 23集, 1955. 12. p. 32.